

『こんな今だから。 / the time is now.』

ハイドルン・ホルツファイント

2022年12月3日(木)~12月31日(日)

*エナジー・フリー・ライブ&トークイベント 12月18日(土)19:30-21:30

アサクサは、オーストリア出身のアーティスト/映像作家ハイドルン・ホルツファイントによる日本初個展『こんな今だから。 / the time is now.』を開催します。社会に溶け込む景観や建築に潜在する権力空間は、人々の振る舞いを制限するという政治的側面を持ちながらも、アイデンティティ形成にも与してきました。ハイドルン・ホルツファイント(1972-)は、ユートピア思想から生まれた、合理性と機能性を重視した20世紀のモダニズム建築が、現在そして歴史的に社会の中でどのように機能し、人々の日常、そしてアイデンティティに何をもたらしてきたのかを、丹念なりサーチに基づいて、映像、写真、インスタレーション作品として発表してきました。

《the time is now.》(2019)は、ホルツファイントが日本で制作した2つの映像を軸としたインスタレーション作品です。メインスクリーンで映し出される映像の舞台は、ル・コルビジエに師事し、日本のモダニズム建築の先鋒となった吉阪隆正の設計による「大学セミナーハウス」(八王子・多摩丘陵)です。高度成長期の日本におけるマスプロ教育への疑問から、個の主体性の確立と教員や学生の垣根を超えた交流を目的に郊外に建てられました。一際目を引く「セミナーハウス本館」(1965)は、コンクリート製の逆ピラミッド型で、竹やぶや虫の音に包まれ、どこか遺跡を思わせます。(注1)

このモダニズムの神殿を背景に、儀式を執りおこなうのは、織茂敏夫(1946-)とおりもしづこ(1944-2019)によるシャーマニック・インプロ・デュオ「いる」です。巫女の装束をまとったしづこによって祝詞が述べられ、水の精霊や微生物が召喚されると、神楽鈴の舞が始まり、敏夫による能管、団扇太鼓の音が加わります。舞が終わり、幽界へ戻っていくように橋を渡ると、その先のセミナーハウス本館で、今度はウッドベースとピアノによる即興演奏が始まります。張り裂けんばかりのしづこの声で始まる緊張感の漂う演奏の間に、様々な記録映像が連鎖的に挿入されていきます。牙城で、あるいはスクラムを組んで、攻防を続ける60、70年代の若き抵抗者たちの姿は、埋め立てが進む辺野古の海岸と抵抗を続ける人々の姿と重なり、エレキギターを掻き鳴らし爆発的エネルギーを放つ1986年のいるによる最後のパンクライブ映像と混融し、琉球の言葉で魂を意味する「マブリ・ヘノコ」と叫ぶ言霊とともに演奏は最高潮に達します。

モニターで展示される映像では、織茂敏夫とおりもしづこ夫妻の自宅で撮影されたインタビューを中心に、いるの日常風景とその活動を支える思想が描写されます。チェルノブイリ原発事故の衝撃から電気を使わないアナログ音楽(注2)へ転向し、民族音楽や古神道からの影響を受けつつ、日本各地の名もなき神々の祠の前で独自の儀式「パンク神楽」(注3)を始めたことが語られます。そして、辺野古埋め立て反対や反戦、投票活動を促すプラカードを自作し、街頭に立つ活動家としての顔や、そして自ら立ち上げた「シャーマン・レーベル」によるカセットテープの自主制作から、二人が「芝居小屋」と呼ぶ家の修繕、中古楽器の調達やオリジナル楽器の制作まで、自力でこなす生活者としての顔が浮かび上がります。音楽、アート、そして日々の営みにおける2人の個性の衝突や融合を通して、今なお絶え間なく探求され、創造されるのは、家父長制ではなく、アニミズムに潜在する男女の関係性です。こうした日々の営みは、社会や世界を変えるためのものではなく、誰かによって支配されないためのある種の不服従行為であり、小さな抵抗の実践なのです。(注4)

近代が築いた制度基盤への揺さぶりがますます加速し、世界各地で小さな地殻変動が起きている今、本展は次のような問いを投げかけるでしょう。19世紀後半の急速な近代化により、政治経済、社会制度、そして文化面においても、換骨奪胎を繰り返してきた東アジアの一国において、超自然的で女性的な土着のアニミズムと、男性的なモダニズムは、集団的なアイデンティティ形成の過程でどのように内面化され、どのように社会に表出してきたのでしょうか？そしてこの二項対立はいかに個人、そして社会の内面化の過程を支え、どのように超克できるのでしょうか？歴史的に風景化されたイメージのなかで、個人の不服従や拒否行為の物語は、凝り固まった全体を解体し、攪拌させ、宇宙的生態系との融和を図ることができるのでしょうか？

本展に際して、12月18日(日)に、本展作家ハイドルン・ホルツファイントと哲学者でアナキズム研究者の森元斎によるトーク、「いる」の織茂敏夫と尺八奏者の織茂サブによるライブを開催します。詳細は、ウェブサイトをご覧ください。



ハイドルン・ホルツファイント《the time is now.》(映像スチル, 2019年). (c) Heidrun Holzfeind.



ハイドルン・ホルツファイント《the time is now.》(映像スチル, 2019年). (c) Heidrun Holzfeind.



ハイドルン・ホルツファイント《the time is now.》(映像スチル, 2019年). (c) Heidrun Holzfeind.

アーティスト:

ハイドルン・ホルツファイント / Heidrun Holzfeind
(1972年、リエント/オーストリア生まれ)

ウィーン大学で美術史を、ウィーン美術アカデミーとニューヨークで彫刻を学び、現在はベルリンを拠点に活動。社会に内在するモダニズム建築や社会的ユートピアの機能の関心から、歴史とアイデンティティ、個人の物語と政治的ナラティブの関係を、映像、写真、インスタレーション、アーティストブックを通して探求。ニューヨーク近代美術館 (MoMA)、ウィーン近代美術館 (Mumok)、イスタンブールビエンナーレなど、世界各地の美術館やフェスティバルでの展示、スクリーニングに招聘されている。カメラ・オーストリア賞、オーストリアアーツカウンシル優秀アーティスト賞などオーストリアを中心に高い評価を受ける。

いろ / IRO

1981年に結成された織茂敏夫(1946-)とおりもしずこ(1944-2019)によるシャーマニック・インプロビゼーション・ユニット。結成当初はフリージャズにパンクノイズの要素を加えた破壊的でハイエナジーな即興演奏を得意としてきたが、チェルノブイリ原発事故及び冷戦後には、電気楽器を使わない演奏へシフトし、世界各地の民族音楽の影響を強め、1970年代のフリージャズ的な即興演奏に、古神道、アニミズム信仰の混合させた「パンク神楽」などを日本各地の名もなき神々の祠の前で行ってきた。脱原発、反核、反戦、人権運動に呼应しながら、商業主義に便乗する活動を一切否定し、自給自足の音楽活動を実践している。

注釈

- 1: 日本のモダニズム建築のパイオニアであり、思想家、登山家でもある吉阪隆正(1917-1986)は、山岳建築や地域計画も多く手がけ、環境や地形、気候に抗わない設計を行い、大学セミナーハウスも建設当初から周辺環境と溶け込むような設計がされた。
- 2: 1984年にA-MUSIKの竹田賢一はこれを「エネジー・フリー・ミュージック」と名付けた。レコード「IRO: anima animus」所収の宇田川岳夫による解説「巫女舞:いろ:anima animus」参照。
- 3: 宇田川岳夫は、パンク神楽を「互いに対立するような霊的存在を合わせ祀る究極のシンクレティズム」と評価している。上記解説参照。
- 4: ジェームス・スコット『実践 日々のアナキズムー世界に抗う土着の秩序の作り方』(清水展他共訳、岩波書店、2017年)を参照されたい。なお現在、1970年代左翼運動から戦後日本社会における労働と運動の省察を試みるホルツファイントの次回作《49年目》(仮)の制作が進行中である。

関連イベント:

ソフト・オープニング

作家在廊のソフトオープニングを実施します。
日 時:2022年12月3日(土)17:00~
場 所:アサクサ

エナジー・フリー・ライブ&トークイベント

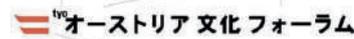
ハイドルン・ホルツファイントと哲学者でアナキズム研究者の森元斎によるトークおよび織茂敏夫と織茂サブによるライブを実施します。お席に限りがございますので、事前にご予約ください。

日 時:2022年12月18日(日)19:30~21:30
場 所:アサクサ(19:20までにお集まりください。)
プログラム:織茂敏夫(ピアノ)と織茂サブ(尺八)によるライブ、ハイドルン・ホルツファイントと森元斎によるトーク、Q&A。
参加費:1,500円
お申し込み:①お名前、②Eメールアドレス、③お電話番号、④参加希望人数を記載の上、team@asakusa-o.comまでお申込みください。お席に限りがあるため、お早めにご予約ください。

展覧会情報:

タイトル:『こんな今だから。』
英 題:"the time is now."
参加アーティスト:ハイドルン・ホルツファイント
会期:2022年12月3日(土)~12月30日(金)
*土日月 12:00 - 19:00 のみ開廊
*その他の日は要予約

会場:アサクサ
住所:東京都台東区西浅草1-6-16
助成・協賛:オーストリア文化フォーラム、O-eA

 オーストリア文化フォーラム

 O-eA

本展はプロジェクト「知らないことの政治学」の一環として実施されています。

プレス連絡先: info@asakusa-o.com
090-8346-3232(大坂)

アサクサは、ギャラリーキュレーターが運営する、40平方メートルの一般住宅を改築したプロジェクト・スペース。美術研究と市場の動向を媒介し、共同キュレーションを推進する。